運動部活動の地域移行と目的の移行

安藤　啓貴　（愛知教育大学）

１．研究目的

教員の長時間労働が問題となり、改善策の１つとして、部活動の地域移行が進められている。本研究では部活動の地域移行とは何かを検討したうえで、移行の可否を考察することを研究の目的とした。

２．先行研究の検討

運動部活動は、これまでにも地域のスポーツクラブと連携する取り組みなどが行われてきたが、必ずしもうまくいったわけではなかった。この部活動の移行に関する先行研究では、部活動の現状や教員の指導意識、部活動の地域移行に伴うメリット・デメリットについて追究されていることが多く、部活動の目的についての言及は少ない。

確かに現段階で挙げられている課題の解決は必要不可欠ではある。しかし、部活動に付随していた目的はどうなるのか、これまでの部活動において大切にしてきた目的を地域に任せてよいのか疑問が残った。そのため、本研究では運動部活動の目的に焦点を当て考察を行った。

３．部活動の部活動性

何をもって「部活動」と呼ぶのかを先行する文献により検討した。その結果、「参加の自主性・自発性」「学校による公認性」「継続性」の 3 点が部活動を部活動として呼ぶために必要な条件だと考えられた。

「参加の自主性・自発性」
他の人から干渉を受けることなく、自らが行いたい部活動に参加すること。

「学校の公認性」
学校が認めた組織による活動であること。

「継続性」
一定期間、活動を続けて行うこと。

これら 3 点は、現在進められている部活動の地域移行においても継承される必要がある。

４．地域移行と目的の移行

前述の 3 つの性状があることで地域移行後の活動も部活動と呼び得ることになるが、その活動はこれまでの目的も伴って実施されると思われる。

とすれば、部活動の地域移行は、部活動性を保ちながら、外部指導者等への変化を受け入れ、併せて目的も移行することで果たされる、と考えられる。

目的に焦点を当てると、運動部活動には、体力や技術の向上である身体的目的と、自己肯定感や責任感、連帯感の涵養である精神的目的などがある。身体的目的と精神的目的をひと括りにして、「人間形成」を部活動の主な目的として見ることもできる。

しかし、この「人間形成」にかかわる目的の移行には課題がある。身体的目的は、比較的成果が分かりやすく、専門的な知識や技術を持ち合わせている外部指導者や組織の元であれば、達成される可能性は高い。対して、精神的目的は、明確な方法があるわけでもなく、成果も分かり難いのではないか。ともすれば、体罰問題にも発展し兼ねない。こうした精神的目的の達成について、請け負う地域の指導者や組織はどこまで対応すればよいのか、といった課題も見えてきた。

５．結論

本研究では、運動部活動の地域移行を果たすには、目的の移行も必要になる、とした。しかしながら、人間形成という目的、特に精神的目的の達成には解決すべき課題が多いことが分かった。

よって、運動部活動の地域移行の可否は、精神的目的を勘案し進めいくことにもかかってくる、と考えられた。

６．主な参考文献

１）國吉正彦, 地域移行に向けた部活動の課題, 武蔵野大学教育リサーチセンター紀要, 13 巻：167 - 174, 2023.
２）スポーツ庁地域スポーツ課, 運動部活動の地域移行について, https://www.mext. go.jp/ content/20220727-mxt_kyoiku02-000023590_2-1. pdf（2023 年 12 月 10 日閲覧）, 2022.
３）関朋昭, スポーツ原論 - スポーツとは何かへの回答 - , ナカニシヤ出版, 2023.